

2008年12月17日(水) 文責 藤松素子

12月に開催した授業公開をふりかえり、授業提供者も迎えて今回のとりくみについての評価と現状の課題、および今後の方向性を検討することを目的として研究会を開催した。

話題提供

授業提供者： 全学共通科目である講義の性格上、学生に主題そのものに興味をもってもらえるよう工夫している。具体的には、学生は一般的に配布資料が多すぎるのを嫌う傾向があるため、基本的にレジュメ1枚におさめるようにしている。板書が少ないと不安だという学生がいるので、できるだけ補足的に板書を活用している。大教室での講義のため出席管理に悩むことが多いが、今年度は冒頭でカードを配り回収する方法を採用している。講義に関する意見があれば、カードの裏に書かせるよう指導している。また、抽象的な話にならないよう、できるだけ具体的な事例をおりませながら説明をしている。

授業提供者： 学生の私語の問題、講義に集中できない問題、寝ている問題等が指摘されているが、そうさせない工夫が必要である。担当科目は専門科目で、その内容に興味のある学生が目的意識をもって受講している。学生には90分の授業の見通しを持たせることが大切で、ここまでは授業を聴き、ここからは各自の意見を言い、ここからはみんなでディスカッションするという流れを常に伝えることで学生は理解し、授業に集中できると思う。また、学生は授業にいろいろな期待をもって臨んでいる。それゆえに、期待はずれの授業だとクレームも多い。自分の授業内容・方法の課題をみつけるためにも、今回のような授業公開はとても有益だと思う。

授業提供者： 学部基幹科目を担当。小集団の参加型授業を展開。報告グループ、質問グループ、フロアからコメントするグループと分けて、各自に役割を付与することで、学生の主体的な参加を促している。学生間に温度差があるのは課題であるが、できるだけ私語をさせず、集中させるための工夫を試行錯誤で行っている。また、毎回、相互評価をさせるようにしている。報告や発言内容だけでなく、グループ間のコミュニケーション等についても数値化すると同時に具体的なコメントを記載してもらっている。次の授業の際にその振り返りをしながら、展開のヒントとして活用している。

話題提供者： 学部の実技系専門科目を担当。受講者数、授業の性格上、教員が一方的に話すような場面はほとんどなく、学生同士が二人で一組になって相互に関わるような場面が多いので、私語等が問題になることはほとんどない。学生は目的意識が明確で、必要な技術の習得をせざるをえない状況なので熱心にと

りくんでいる。ただし、学生 40 名弱に教員 1 名体制では、十分な指導ができないという限界がある。

司 会： 授業を提供した立場から、その意義や感想をご自由に。

授業提供者： 緊張感があった。新人の教員に受けてもらうのもよいかもしれない。個人的には同じ科目を受け持つ別の教員の講義を受けてみたい。必修という最も興味をもちにくい授業を 1 講時に設定することの是非や私語問題等、さまざまなことを考える機会となって有益であった。今後どうしていくべきかについては、まだ考えが及んでいない。

授業提供者： 授業評価こそ、教育学部の教員がエネルギーをさき、アイデアを出す課題。何をみるべきか、どう評価するべきか検討すべき。領域の同じ者、異なる者に観てもらふことで、さまざまなことがわかる。その意見に真摯に耳を傾けて改善にむすびつけることが必要。

授業提供者： 依頼がきた時には、正直つらいと思ったが、やってみると意見がもらえるのは率直にうれしいし役にたつ。今後は、学生からの評価の高い先生に公開してもらってはどうか。学ぶべきことが多いと思う。

授業提供者： できるだけたくさんの先生に観てもらいたいし、自分も観たい。専門の違う先生からの意見ももらいたかった。自分の授業を積極的に変えていくためのヒントがえられると思う。朝 9 時から夕方 5 時までいつでも観られるような設定を工夫してみてもよいのでは。

意見交流

室 員： 提供者の積極的な意見を聞き、授業公開日を設定するのではなく、「授業公開教員」を設定するのも一案だと考えた。各学部 1 名を選出し、担当科目の 14 回すべてを公開可能にし、事前に申し込んだ上でどの回にも参加できるような形態をとってみると参加しやすく、特別な期間だけでなく日常的な授業公開が可能となる。考えてもよいのではないか。

また、授業評価の基準は一定のものではないのではないか。小集団のゼミと 200 人をこえる大講義では、おのずとその方法・進行は異なる。その特殊性に応じた評価基準を考えていくことが必要だろう。

さらに、学部学科で共通の基準を設定するのは困難なため、学部学科の FD 活動を本格化させることが必要になってきているのではないか。

室 員： 授業は、観ても観られても刺激的である。領域を問わず、その内容は言うに及ばず、運営方法ひとつとっても大きなヒントになる。教員研修として大授業公開を設定し、全学的に取り組んでみるのもおもしろい。

室 員： 自分の授業を高める研修として役立つだけでなく、教員の交流ができるのがとてもよい。

室 員： 日常的に公開する、いつでも扉をあけておくという機運が広がるとよい。教員相互の日常的な交流も深まる。

室 員： 話術に長ける、授業運営のうまい教員の授業は確かに参考になる。他方で、大講義室の 200 人を超える講義での限界をふまえた参観も意味があるのではないか。

まとめ

授業提供者の積極的な発言に刺激され、活発な意見交流をすることができた。
次年度に向けての検討課題は以下の通りである。

- 1) 授業改善に際して、提供者・参加者双方に有意義な授業公開ではあるが、現状のような公開日設定では、希望者が参加すること自体に困難を有するため、授業公開教員を設定し、いつでも参加可能な条件を整備する。
- 2) 1回の授業を公開・参加するだけでなく、相互の意見交流の場を確保することがより重要である。その中から、相互の授業改善に関わる教訓がえられる。
- 3) 希望者の参加を可能とする方法のひとつとして、教員研修として模擬講義的に授業公開を行うことも考えられる。